

## 2122 離島覚書（沖縄県・久高島）



令和3年12月14日

### 斎場御嶽

久高島には南城市にある安座真港からフェリーと高速船が出ている。安座真港を13時に出発する高速船に乗る予定だったのであまり時間がない。トヨタレンタカーの那覇空港営業所で車を借りて急いだ。高速道路を経由し南条市に向かうが、高速道路はできて間もないためか料金は取られなかった。出発予定の10分前に到着したので、「間に合った」とほっとして切符売り場に向かったのだが、13時の高速船はあいにく欠航になっていた。

「福徳岡ノ場」の噴火によってもたらされた軽石のためフェリーが運航できず、その影響で高速船の出発時間が15時に変更されていたのだった。出発まで2時間ある。近くの食堂でソーキそばを食べ、続いて斎場御嶽に行く。以前、久高島を訪れた時にここにも来ているが、ずいぶん様子が変わっていた。前は近くまで車で行けたが、現在は下の駐車場に停めて御嶽のある管理所まで歩かなければならない。しかも無料だったのが、300円の入場料をとる。2000年12月に世界文化遺産に指定されてから観光客が急増したようで、すっかり観光地化していた。ここ2年ほどは新型コロナの影響で観光客は減っているが、ピーク時には年間43.1万人が訪れた。観光客が増えて御嶽の自然が失われると危惧した南城市長は「男人禁制」を提案したそうだが、さすがに観光業者の反発にあい、断念したという。

南城市地域物産館の駐車場に車を停めて、自動販売機でチケットを購入、歩いて御嶽に向かう。入口まで10分ほどを要した。コロナがひと段落したせいも、観光客はかなり多い。

斎場御嶽は沖縄の7大御嶽の一つで、琉球の創世神であるアマミタキヨ（琉球の国土を創成したとされる神話の女神）が創ったと伝わる。琉球王国最高の御嶽とされ、聞得大君（ノロを束ねる国家の最高神職）が管理し、歴代聞得大君の就任の儀式が行われた場所である。また琉球国王が久高島に渡る際にここで儀式を済ませて訪れたという。

自然な植生が残されたままの荘厳な御嶽内を、大庫理（ウナグーイ）、寄満（ユインナ）、三庫理（サングーイ）の順に巡る。三庫理の岩の間からは、以前来た時には久高島を参拝できたが、現在は「密を避ける」との名目で立ち入り禁止になっていた。

久高島では西銘政秀さんにガイドを頼んでいた。時間が変更になったので、携帯電話をかけたが通じない。予約した時に届いたメールに返信しようとスマホをチェックすると、予約日が16日になっていた。あわてて今日改めて案内してもらえないかをメールで通知した。しばらくして西銘さんから電話が入り、OKということになった。



斎場御嶽の管理事務所の入口（左）、三庫理の拝所（右）

## 軽石

本島と久高島を結ぶフェリーは1日3便、高速船も1日3便運航されている。フェリーと高速船は交互に走り、所要時間はフェリーが約25分、高速船は約15分である。フェリー、高速船ともに久高海運合名会社が運航している。

安座真港の岸壁にはフェリーくだかⅢ（89トン、旅客定員96名、車輛6台）が停泊していた。その近くで海底付近から水を吸い上げ、軽石をろ過回収する作業が行われている。久高島の徳仁港には一時大量の軽石が溜まっていたようだが、今は姿を消し、安座真港にも浮遊している軽石は確認できなくなった。ろ過しているネットの中を覗いたがほとんど軽石は見られず、騒動は収束しているようにみえた。しかし高速船は平常通り運航、フェリーが欠航というのは、冷却水の取水構造に問題があるのかもしれない。フェリーは取水水深が深いため、中下層を浮遊している恐れのある軽石が取り込まれることを警戒しているものと思われる。

15時発の高速船・ニューくだかⅢ（19トン、旅客定員80名）には10数人が乗った。観光客が多く、しかも若い人たちだ。航行に支障はなく、約15分で久高島の徳仁港に着いた。

久高島に来るのは2度目である。水産庁の環境・生態系の調査で沖縄に来た折、時間に余裕があったので「神の島」として知られるこの島をみたいと思って訪れたのだった。この時は自転車を借りて北東端まで行き、島の人と話すこともなく、日帰りした。島にガイドがいることはインターネットで知り、久高島には「イザイホー」を始めとする様々な伝統的祭祀が営まれ、関連する建物も多いことから、島の歴史や祭祀を手短かに理解するにはガイドが必要と思ったのである。

港には西銘さんがワンボックスカーで迎えに来ていた。島に4人いるガイドの一人で、名

前が私と全く同じだったので、西銘さんを選んだわけだ。彼は75歳で私よりも2つ上である。本島で務めていた会社を20年前に早期退職して久高島に戻り、首里城や斎場御嶽でガイドを務めた経験がある。早速、車に乗り、島の最東端にあたるケーブル岬に向かう。



海底からポンプで海水を汲み上げる作業（左）、軽石を分離するためのネット（右）

### ケーブル岬

久高島は北東と南西方向に細長い平坦な島で、最も高いところでも17mしかない。島の面積は1.36 km<sup>2</sup>、周囲は8.0 kmである。ここに112世帯206人（2015年国勢調査時）が住んでいる。このうちIターンの人が10人ほどおり、半分は世帯を持っているという。

戦前の島の人口は約400人で推移していた。戦後急増し一時700名に及んだが、1960（昭和35）年時点では134世帯634人であった。世帯数は当時のあまり変わらないが、人口はこの60年間で約1/3に減少している。

島の集落は南西部に形成され、集落の外れにある久高島宿泊交流館付近の十字路から北東側は「神の領域」になっている。したがって住宅は一切建てられないし、自然を改変することも基本的に許されない。つまり島の面積の3/4ほどは人家がなく、自然の植生に覆われている。交流館の隣の広場は神を迎える場所だそう。

集落から島の真ん中を道路が走る。北東方向に進んだ先端がケーブル岬である。途中にはおよそ80年前に島の青年会が道を切り開いた時の記念碑が立ち、牛の飼養場と牧草地（農家は1軒）、灌漑用の溜池があるだけで、自然の植生が続く。電信柱が立っていたが、これは牛の飼養場に電気を送るためらしい。

中央の道（ナカミチ）は舗装されているが、島の東海岸を走る東道（アガリバルミチ）と合流すると未舗装の砂利道に変わった。道の両側にはアダンやビロウの木が繁る。神の領域だから自然がそのまま維持されている。久高島では風が強いためビロウなどは大きくなれないという。なお島にはハブは生息していない。

岬の正面に津堅島が横たわる。ケーブル岬は琉球開闢の祖・アマミキヨが上陸したと神話に伝わる場所で、西銘さんによると、小さな入り江の正面にある岩を経て上陸したとされている。

この入り江の波打ち際には、例の軽石が少しだけ漂着していた。軽石は過去に漂着したことがあるそうで、少し内陸部に入ったところにある黒っぽい軽石は過去に漂着したものだという。

後述するように琉球国王は2年に1回、久高島を訪れているが、この岬には来ていない。西銘さんによると、ここは豊漁祈願の場所で、天孫降臨神話はあと付けだという。

豊漁祈願をしたのは、このケーブル岬はアイゴの稚魚（島ではキスクと呼ぶが、一般にはスクガラス）が集まるところで、旧暦の6月1日から7月1日までの1ヶ月間に2回ほど操業するからだ。久高島では後述するように多くの祭祀は女性が行うが、漁撈祭祀はソールイガナシー（竿を取る者という意味）と呼ばれる男性である。採取したアイゴの稚魚は参加者で平等に分け、塩漬けにして保存した。



ケーブル岬に続く道（左）、神が上陸したと伝わる小さな入り江（右）

### フボー御嶽とイシキ浜

ケーブル岬から集落の方に戻る中間付近の西海岸に面してフボー御嶽がある。このフボー御嶽は琉球の7大御嶽の一つとして名高い。ちなみに7大御嶽とは、先に示した斎場御嶽と国頭辺戸・安須森、今帰仁・カナヒャブ、藪薩の浦原、天頂雨ツヅ御嶽、首里森御嶽である。

この一帯は、先祖の魂が宿り、普段は草木1本とることを許されない聖地だ。島のノロ（神女）が祭祀の時にのみ入る場所で、男は入ることを許されない。我々は御嶽の中に入ることができないので、入口から中を覗いてすぐに戻った。2001（平成13）年に秋篠宮ご夫妻がここを訪れた時も中に入れたのは紀子さんとSPを含めた女性3人だけであったという。何でも中央には円形の広場があって、ここで祭祀が営まれる。

久高島は琉球の始祖であるアマミキヨが降臨したとされる「神話の島」だったから、琉球王朝の歴代政権（英祖王統（1259～1349年・5代90年）、<sup>きつと</sup>察度王統（1350～1405年・2代56年）、第一尚氏（1406～1469年・7代63年）、第二尚氏（1469～1879年・19代410年）の4つの政権）と久高島の関わりは深かった。ちなみに英祖王統の5代目は久高島生まれだったという。このため琉球国王は2年に1回、第二尚氏の琉球神道における最高のノロである聞得大君は毎年久高島を訪れたといわれている。久高島に来た国王は最初にフボー御嶽に参ったのは上述した通りである。このフボー御嶽では現在でも年5回ほど祭祀が行われている。

なお現代でも聞得大君の制度は残っていて、第20代は琉球国王尚泰の玄孫である野津圭子（岡山のカバヤ食品の創業家に嫁いでいる）が就任したが、2019年に71歳で死亡したため、2020年に21代の臨時聞得大君として尚満喜が就任している。

続いて東海岸のイシキ浜に向かう。サンゴ礁が広がり、砂は白く青い海と美しいコントラ

ストがみごとだ。イシキ浜にも例の軽石が打ち寄せたようで、岩の下にそれほど多くはないものの飴玉ほどの白い軽石が転がっていた。

この海岸はニライカナイ（はるか遠い東の海の彼方）からた五穀（麦や粟など）の種子が入った壺が流れ着いたという伝説の場所であり、来訪神が島に来たときに船が停泊する場所ともいわれている。この浜は琉球国王も島に来た時は必ず訪れたとされる神聖な浜なので、遊泳は禁止されている。ウプヌシガナシーのお祭りのときはここからお祈りをするそうだ。

この浜では、2月と12月の年2回、島の男たちが硬い石を3つ拾って並べて持ち帰り、<sup>みずのえさる</sup>壬申の日に戻す習わしがあったそうだ。石のように固くなりますようにと、麦の豊作と男の健康を祈願したという。



フボー御嶽の入口（左）、イシキ浜（右）

## 外間殿

イシキ浜から集落に戻った。新しくブロック塀になっているところもあるが、もともと集落の家々はサンゴ石の塀で囲まれていた。西銘さんによると、久高島の塀は少し曲げてつくられているそうだ。最初に案内されたのが外間殿<sup>ふかまどうん</sup>である。

外間殿は、久高殿と並ぶ島の2大祭祀場の一つである。久高島における祭祀は琉球王朝第二尚氏時代の三代尚真王によって定められたノロ制度と深く関係しているので、琉球王朝時代のノロ制度を整理しておこう。

比嘉によると、久高島における祭祀は秩序霊の守護力によって島の人とその生活空間から混沌霊を取り除き、秩序をいきわたらせるために行うものだったそうだ。この守護霊を引き受けるものを構造的に順序つけ、守護力を発揮させる仕組みとしたのが久高島の祭祀組織で、①家レベル（後述するイザイホーという神職者就任式を経て神女になった主婦が行う）、②血族レベル（それぞれの始祖家の神職者が行う）、③島レベル（祭祀を支える聖職者が行う）で展開されていたという。

久高島にはムトゥ（草分家）、つまり分家した子孫からみれば最初の家を自分のルーツの始祖家とする帰属意識が高かった。始祖家は「古ムトゥ」と呼ばれて8家あり、後述する大里家がその一つで、最も古い。始祖家は島の北側に位置し、分家は順次島の南側に広がっていった。これは、子どもは必ず親の家の方（南）に分家するという伝統に基づくものだ。この8家に次いで古い家は「中ムトゥ」と呼ばれ、こちらは18家ある。

もともと久高島では家レベル、血族レベルで祭祀が行われていたが、尚真王の時代に祭政一致政策が導入されると、今までのムトゥ神を求心力とする時代からノロを中心とする島レベルの祭祀制度に移行したのである。琉球王朝は間切（町村）や島々に土地を給する官人としての女性神職者を任命し、その上位に三十三君と称する高級神女を配し、さらに最上位に聞得大君を君臨させた。聞得大君には琉球国王の妹や妻が就任した。

当時、久高島では東側に外間根家と西側にタルガナーという2大ムトゥを中心に家が集まっていた。ノロ制度を導入するにあたり、この2家をノロ職に昇格させたのである。外間根家は公式のノロとし、タルガナー家のノロは非公式のノロとし、久高ノロと呼んだ。つまり島レベルの祭事の司祭者は外間ノロ、準司祭者が久高ノロということになる。そしてこの2人のノロの出た家に殿という島レベルの祭祀場が設置されたが、それがこの外間殿なのだ。この両家のノロに根人（ニーチュ、男性聖職者）、ウメーギ（補助者）の6神職者と外間根家の娘継ぎの根神（ニーガン）とそのウメーギを加えた8神職が島の司祭団（クニガミ）を構成していた。このように久高島は仏教の影響をほとんど受けていない島なのだ。

外間ノロは11代続いたが、現在は途絶えている。9代までは娘継ぎ、その後嫁継ぎになつたらしい。ノロは権力者として「ノロ地」と呼ぶ畑1,180坪と後述するイラブーの採取権が与えられていた。

外間殿には、天頭神（天の神の総帥）、玉礼乃神（太陽神）、松乃美神（月の神）、ニレー大主神（竜宮神）、アマミキヨ神（国造りの神）百畑地方照乃神（植物の神）、梁万神（健康の神）などが祭られている。ここでは外間ノロと外間根人が祭祀となり、旧正月やマッティ（収穫祭）、ハンザアナシー（祓い清め）、ハティグアッティ（お祓い、健康祈願）、などの主要な年中行事が執り行われていた。

建物は2つあり、左側が久高島出身の英祖王統五代西威王の産屋跡で、右が外間殿である。室内には各家庭にある香炉の大元にあたるミウプグイミンナカと呼ばれる大香炉が置かれている。久高島では子供が生まれると、この外間殿で根神によって名づけの儀式が執り行われたが、その時の願い言葉に「あまりえらくなつてはいけない、普通であつてほしい」というものがあるそうだ。



外間殿と西威王の産屋跡（左）、香炉が置かれている外間殿の内部（右）

## 大里家

続いて大里家に行った。大里家は上述した「古フトゥ」8家の一つで、最も古い始祖とされる家である。母屋の隣にもう一つ建物があつて、拜所となっている。もちろん後継ぎは絶え

ている。大里家にまつわる伝説として次のような話がある。

第1尚氏時代の第7代・尚徳王が喜界島征伐の後戦勝報告に来島した折、大里家の娘クニチャサと恋仲に落ち、政治を省みずに久高島にいる間に首里城内でクーデターが発生、尚徳王は失意のうちに海に飛び込んで絶命、娘のクニチャサは家の前にあるガニユマルの木に首を吊って死んだという。尚徳王の死によって第1尚氏の王権は第2尚氏に移行した。なお第2尚氏の始祖は伊是名島出身の尚円である。伊是名島の離島覚書では、「尚徳は稀にみる暴君だったようで国内は大いに乱れ、やがてこの若き国王は失意のうちに病死した」と書いているので、どちらが真相か調べる必要があるようだ。

なお比嘉康雄氏の著作によると、クニチャサは目に見えない異界と交信する超能力を持つと評判の高いシャーマンであり、尚徳王はその存在を知り何らかの苦境を打開する目的でここを訪れたのが真相ではないかとしている。



大里家の建物（右）、隣に並ぶ拝殿とガイドの西銘さん（左）

## 御殿庭

御殿庭は外間殿と並ぶ祭祀場で、こちらは久高ノロが仕切っていたので、久高殿とも呼ばれる。久高ノロは外間ノロと同様、ノロ地1,711坪とイラブーの採取権を与えられていた。久高ノロも娘継ぎで後年嫁継ぎに変わったが、現在は不在である。

御殿庭には3つの建物が並ぶ。中央がアジャギという神が祀られている場所、右側は集落の始祖の1人とされるシラタルーを祀った拝殿、そして左側が後述するイラブーの燻製小屋（バイカンヤー）になる。ここはイザイホーの主祭場となるところで、かなり広い広場がある。

背後の森はムトゥの始祖が鎮まる御嶽になっていてヤラブ、ガニユマル、アダンなどが生い茂る。イザイホーの際は「七ツ屋」という2棟の草葺きの施設がつくられる。ここはイザイヤマと呼ばれ、神聖な地として立ち入りは一切禁止されている。



左がバイカンヤー、中央がアジャギ殿、右がシラタルー拝殿

その他にもマッティ(麦の収穫祭)、ウブマーミキ(大漁祭)、ハティグアッティ(お払い、健康祈願)などの祭祀もここで執り行われる。

### イラブーの燻製

イラブーは標準和名をエラブウミヘビといい、コブラ科の海蛇である。エラブトキシンという毒を持ち、その毒性はハブの70~80倍だという。ただし口が小さいためめったに咬まれることはないので、通常は素手で捕る。サンゴ礁海域に生息し、久高島では8~12月にかけて海岸の岩陰などで産卵し、1回に3~8個の卵を産む。

このイラブーは滋養強壮効果が高く、古くから琉球王国の宮廷料理あるいは煎じ薬として珍重されてきた。このため、久高島ではイラブーの採捕は、上述したように外間ノロ家、久高ノロ家と外間根家の3家に特権として与えられていたのである。採捕したイラブーは御殿庭にある燻製小屋で燻製品に加工されて、以前は旧暦の9月に神様にお供えして後、首里城に納められていたという。

イラブーは久高島灯台付近の岩場に集まって産卵する。採捕は産卵に集まったところを捕獲する。漁期は旧暦の6月24日から年末までである。ノロがいたころは、潮が引いた時にノロが手づかみでイラブーを捕ったが、ノロが絶えた現在は男性3人がイラブーを捕っている。毎年定期的に島にやってくるこのイラブーは上述したキスクとともに神からの贈り物と考えられていた。

採捕したイラブーは燻製小屋の裏にあるケージに収容し、一定量貯まったところで燻製にする。昔は捕らえたイラブーは布袋に入れていたそうだが、県の指導で現在の方式に改まった。イラブーは爬虫類だからこのケージの中で3ヶ月ほど生きているという。

イラブーが180匹貯まると、燻製作業にかかる。イラブーを水洗して大鍋で茹で、その後丁寧に鱗を落とし、排せつ物を絞り出して再び水洗し、さらに茹でる。これを燻製小屋で7~8日間かけて燻製にする。燻煙材は島に自生するモンパノキの葉とアダンの実を乾燥させたもので、薪にはモクマオウの木が使われる。

西銘さんによると、この燻製技術は第1尚氏の時代にマラッカ海峡に派遣した官吏がモルジブで学び、琉球に持ち帰ったものだという。久高島で鯉節がつくられていたという記述を目にすることがあるが、じつは鯉節ではなく、このイラブーの燻製の間違いだという。燻製の技術はその後薩摩藩に伝わり、鹿児島で鯉節が盛んにつくられるようになった。



イラブーの燻製場(左)、イラブーを飼っておくケージ(右)



## 久高島宿泊交流館

新型コロナが流行する以前、久高島には年間6万人ほどの観光客が訪れていた。フェリーと高速船あわせて1日6便も就航しているのはこのためだ。日帰り客が大半であるが、中には泊まる人もいるので、小さな島ながら宿泊施設は民宿3軒、郵便局（宿泊可能）、久高島宿泊交流館を合わせて5軒ある。またレンタサイクルを扱う店が2軒ある。

西銘さんに宿まで送ってもらい、ガイド料の7,000円を支払って別れた。

交流館はNPO法人久高島振興会が指定管理者になっており、2000年から運営されている。ちなみに同振興会は後述する「食事処とくじん」と久高・安座真の両船客待合所の指定管理者にもなっている。交流館の部屋は1階に5室、2階に4室あり、1階は最大5名まで2階は4名まで泊まれるので、宿泊定員は41人と島内では最も規模が大きい。部屋は畳で布団を敷いて寝る。洗面所、トイレは共用、風呂はなくシャワーのみである。この日は団体客が宿泊しており、満室だった。

1階には久高島民俗資料室が併設されている。ここには比嘉康雄氏の写真を中心にイザイホーを主体とする資料が展示されていた。比嘉氏は1975年から25年間にわたって久高島に通い続け、島の祭祀や民俗儀礼を取材し、久高島についての著書も上梓している。久高島を世間に知らしめたイザイホーについて紹介しておこう。

イザイホーは12年毎に午年の旧暦11月15日から4日間にわたって行われる儀式である。久高島では<sup>うし</sup>丑年の30歳から寅年の41歳になった主婦は全員が神女（タマガエー）になることになっており、70歳になるまで務めなければならない。この聖職者への就任式がイザイホーである。1日目は祖母霊の香炉の継承式と新入りのものが七ツ橋を渡って祖母霊のいる七ツ屋に入る儀式、2日目は七ツ屋他界空間で祖母霊と一夜を過ごした主宰者がこの世に登場して舞う儀式、3日目は一人前の神女として認証を受ける儀式、4日目は家回り、桶まわりの儀式が執り行われる。この儀式の目的はよくわからなかったが、最近になって聞得大君に仕える儀式だったのではないといわれるようになったと西銘さんはいう。

このイザイホーは1978年を最後に行われていない。イザイホーの対象となる女性がいなくなり、儀式を伝えるノロや先導役がいなくなったためだ。西銘さんによると、イザイホーの記録は映像として残っているので復活も可能だが、復活する見込みはないという。家族そのものが崩壊しつつあるなか、社会はどんどん変わっていく。ノロ制度が発足して500年ほど経つが、もはや時代の遺物となるのは間違いない。



久高島宿泊交流館の建物（左）、1階に併設された民俗資料室（右）

## 食事処とくじん

宿泊交流会館は素泊まりなので外で食事をとらなければならない。島には昼食を提供する食堂はいくつかあるが、夕食が食べられるのは「食事処とくじん」しかない。同店のオーダーストップは19時、閉店時間は20時であり、夕食を逃すと食べる場所がないから、急いで歩いた。店は徳仁港の近くにあり、10分ほどを要した。

店には客はおらず、私1人である。あとから女性の3人組が入ってきた。店の従業員は男2人と女1人、何れも若い。自動販売機で食券を買うシステムになっていて、生ビールと久高御膳(1,500円)とイラブー汁(1,800円)の食券を購入した。店の人から、高齢者が「こんなに食べられるのか」と心配されたが、イラブー汁はおそらく久高島でしか食べられないだろうから無理をしても食べる決意であった。

久高御膳は、シイラ・ゴーヤ・モズク・かき揚げの4種の天麩羅、大根とイカ・タコ・刺身のなます和え、切干大根の煮物、漬物、金時豆のぜんざい、そして海ブドウが上にのったマグロ丼と味噌汁であった。島では後述するようにモズクや海ブドウの養殖をしているし、マグロの漁業も行われている。金時豆も作られていたし、島の土地に大根の栽培は適しているから食材は基本的に島のものばかりである。何とも素晴らしいこだわりで大感激。ビールに加えて焼酎も飲んだ。



食事処とくじんの建物(左)、日替わり定食の久高御膳(右)

イラブー汁は上述したイラブーの燻製品を大根、コンブ、ソーキと一緒に約1日かけて煮込んだものである。汁に加えてクチナジ(フエフキダイの仲間)とイラブチャー(ブダイ)の刺身が付いた。

イラブーは新婚旅行の時に石垣島で食べたことがあり、生涯で2度目になる。およそ46年前に食べたイラブーは久高島のように大根やコンブ、ソーキは入っておらずイラブーそのものを煮込んだものだった。硬くて食べるのに苦労し、井いっばい出てきたが、全部食べるができなかった記憶がある。とくじんの汁はイラブーそのものが柔らかく、骨を除いて全て食べられた。しかもコンブや大根、ソーキが煮込まれており、じつに美味しいスープにできあがっていた。また燻製にしたイラブーを泡盛に漬けたイラブー酒もあった。こちらにも挑戦した。

薩摩藩は1609年に琉球に侵攻し、支配下に置いた。コンブは北海道から北前船によって関西にもたらされ、薩摩藩を通じて琉球にもたらされたことから、イラブー汁にコンブが使

われるようになるのは、17世紀後半以降のことだろう。

食事を済ませ、暗い夜道を交流館に戻った。集落内は迷路のようになっているから来た道に戻ったが、外灯がないため月明かりが頼りだった。



刺身が付いたイラブー汁（左）、イラブー酒（右）

令和3年12月15日

### 石垣の集落

宿泊交流会館の1階のロビーにある椅子に腰かけて、昨日の記録をノートに書き留める。6時40分ごろ外が白み始めたので、6時50分に無人の宿泊交流会館を出発し、集落内を散策する。もともとサンゴ石でつくられた石垣で敷地は囲われていたが、現在は2/3ほどがブロック塀に変っている。一部にフクギが植えられ、伝統的景観は残っている。ただしこの集落の人家は基本的に戦後再建されたものである。

沖縄戦当時、久高島の島民は本島に疎開しており、島にはほとんど人はいなかった。久高島の婦人会の会長をしていた西銘さんの証言によると、当時130軒ばかりあった人家のうち焼け残ったのは23軒だったというから約8割の人家は消失したのである。

上述したように久高島の集落は北側から分家が増えるごとに南側に広がっていった。したがって計画的に集落がつけられたわけではないので、道路は迷路のようで、地図を見てもよくわからない。おまけに狭くて車の通行は苦勞する。



サンゴ石の塀とフクギの街路樹（左）、ブロック塀の町並み（右）

久高島は山がないから水が少なく、島内に5ヶ所あった井戸から水を運んでいた。久高漁港の崖下には水がでたようで、サンゴ礁を掘った階段の下に井戸（ガー）があった。島の人々

はこの階段下から桶に水を汲み、各家に運んだ。

ところが集落の人家の庭の多くには、円筒状のコンクリートを重ねた高さ2mほどの円柱が並んでいる。米軍の統治下にあった時代に、軍政府が島の水を確保するために雨水を貯水することを勧めたようで、その名残である。

日本に復帰後の1977（昭和52）年になって、ようやく本土側から海底送水管が完成し、島の人々は水の苦勞から解放された。



久高漁港近くにある井戸（左）、人家の庭に置かれている雨水タンク（右）

### 小中学校と留学センター

集落の南側の外れに南城市立久高小中学校があった。幼稚園も併設されている。学校の隣に津波避難所が整備され、学校の屋上とつながっている。避難所の上部は海拔21.35m、島で最も高い場所に相当する。10mを超える津波が発生すれば島には逃げる場所がないため、避難場所の整備が求められたのだろう。この避難所の収容人数は300人というから、島民全てが避難可能なのだ。2016年2月に完成している。

今年の4月現在、小学生の児童数は16人（うち留学生在が1人）、中学校の生徒数は11人（うち留学生在が9人）である。久高島では小中学生が減少し、学校の統廃合が心配されるなか、何とか学校を維持しようと、島外からの留学生を受け入れる制度を2001年にスタートさせ、ちょうど20年を迎えたところである。受け入れは小学校5年生から中学3年生までで、留学生は宿泊交流センターの隣にある久高島留学センターで共同生活をしている。



津波避難所（右端）が併設された小中学校の校舎（左）、久高島留学センター（右）

## 島の土地制度と農地

小中学校の南側には農地が広がる。豌豆、金時豆、分葱、玉葱、ホウレンソウ、ラッキョウ、人参、レタス、キャベツなどが植えられていた。規模からみて自給用である。

もともと島には水田はなく、したがって米は採れなかったが、畑ではもっぱらサツマイモや小麦がつくられていた。島民の生活は半農半漁で男たちは漁業の出稼ぎで島を離れることが多かったので、農業は女の仕事だったという。男たちは島の外で働いた。琉球王朝の時代は進貢船（中国との交易や使節を派遣した王朝の官船）の船乗りとして、薩摩藩の支配を受けるようになってからは薩摩との行き来に、明治期以降は奄美大島方面への出漁、さらに八重山方面へのカツオ釣りへと変遷を重ねてきた。

ところで、沖縄県では琉球王朝時代を通じて土地は全て共有地であったが、1899（明治 32）年の「土地整理」によって共有地は私有化された。しかし今なお「土地整理」以前の総有制を残しているのが久高島であり、沖縄県で唯一の存在である。

上述したようにノロや根人は宅地と畑の所有を許されたが、それ以外は島の総有地（字地）の使用を許されていた。山口堯起らの調査によると、島の所有区分は、ノロなどの個人有地が島全体の 8%、沖縄電力変電所の私有地が 0%、字有地が 71%、学校用地などの村有地が 7%、海岸線の国有地が 13%で、字地が圧倒的に多い。つまり久高の字地は島民の総有であり、島民はこれらの父祖伝来の土地の使用収益の権利を享有して現在に至っているわけだ。

この歴史的伝統的な島の慣行は 1988 年に「久高島土地憲章」として成文化されている。憲章では、「字はこの慣行を基本的に維持しつつ、良好な自然環境や集落景観の保持と、土地の公正かつ適切な利用・管理との両立を目指すもの」としている。土地管理委員会は区長、書記、字選出の村会議員、農業委員、郷友会代表者を含む 13 人で構成され、土地の利用権を享受できる字民は、① 先祖代々字民として認められた者およびその配偶者、② 字外出身の者で現在字に定住し、土地管理委員か及び字会が利用権を承認する者と定めている。最も団体的色彩が強い共同所有形態で、各共同所有者は持分権や分割請求権はなく、収益権のみである。



貯水タンクが置かれた畑、小さく区分されている

総有地は島の 10 組に配分され、1 組に属する畑は 15 等分され、その 1/15 をチュージ（1 地）と呼んだ。1 地は平均 2 反弱だった。そしてこれらの区分した土地は広く分散していたようだ。戦前までは 16 歳から 60 歳までの男子に 1 地ずつ与えられたが、戦後は家単位に

1 地が配分されるようになり、家族の多い家には 2 地が割り当てられた。

久高島の営まれている農業は、自給的農業の他に肉牛の繁殖農家が 1 戸と野菜工場である。牧草地は集落の端から 300m ほど北東に位置し、牛舎が置かれている。御嶽のある聖地を除いて草地になっているが、この土地の利用形態はどうなっているのかわからない。野菜工場は交流宿泊会館の南にある。工場ではレタスやチンゲン菜などが水耕栽培されている。事業主体は神谷産業という土建会社で、2017 年から建設が進められ、2020 年 1 月に初出荷にこぎつけている。当然、上述の土地の総有性との関係がどうなっているのか疑問になる。島内にこの野菜工場が進出することに島民から抵抗感が示されたため、南城市は公共事業として市が土地を借りる形で事業が進められたようだ。

高度成長期にはサトウキビの導入が検討され、水を確保するために溜池をつくったが水が溜まらずに断念、30 年ほど前に溜池を改修して水が溜まるようになったが、今度は農業を営む人がいなくなったという。

## 久高漁港

迷路のような集落を散策していると、商店や軽食の店、郵便局などがあった。その先で車を洗っている人がいたので、立ち話をする。昨日ガイドを頼んで島を見て歩いたと話すと、「それは私ですよ」と言われて「しまった」と思った。昨日は帽子をかぶりマスクをしていたので素顔が分からなかったためである。西銘さんの家の下が久高漁港だった。

久高漁港（第 1 種）は沖縄復帰直前の 1970（昭和 45）年に漁港指定を受け、復帰後の 1972 年から 2003（平成 15）年までの約 30 年間に渡って段階的に整備が進められ、今日の形になった。なお、隣にはフェリーと高速船が発着する地方港湾の徳仁港が整備されているが、漁船はもっぱらこちらの漁港を利用している。

この港は大君口・君泊と呼ばれ、琉球王朝時代に聞得大君と国王が久高島を訪れた時に使われていた小さな港だったが、復帰後、浜を削り、漁港を整備したものであった。付近には井戸があり、約 5,000 年前と約 3,000 年前の貝塚が見つまっているという。

漁港は防波堤を挟んで北側と南側に分かれ、北側には漁船 6 隻と海上タクシー（ジュピター観光）が 1 隻係留されていた。このうちの 2 隻は比較的大きな漁船で、両方とも第八海秀丸と書かれていた。おそらくソデイカ釣りやマグロ旗流しを営む船と思われる。その隣に錦漁丸という漁船が係留され、旗流しのポールと巻き揚げ機やドラムが装備されていたことからやはりマグロ旗流しの船と思われる。

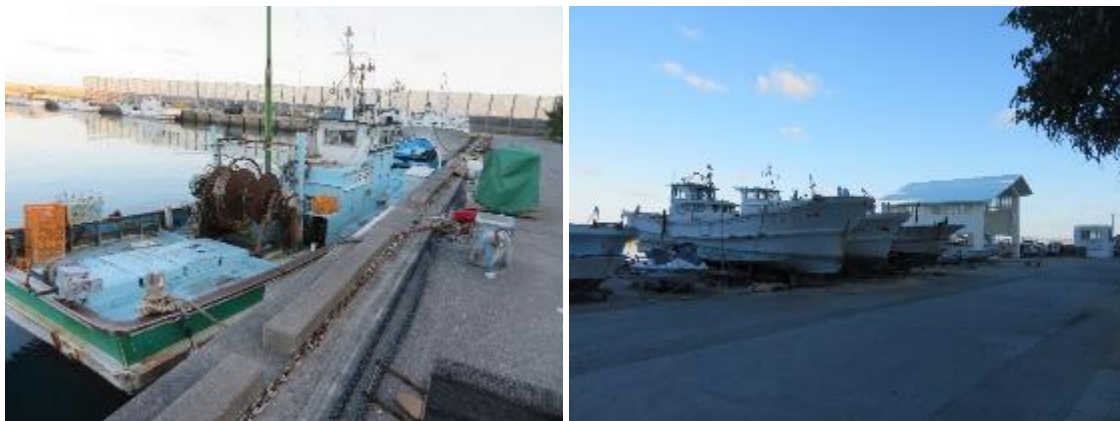
南側のエリアにはモズク養殖の作業船が 4 隻ほど係留され、さらに南側には斜路と漁船の修理場のような建物があった。10 隻ほどの漁船が陸揚げされていたが、実際に使われているかどうかはわからない。

久高島の漁師は本島側の知念漁協に所属している。久高島には同漁協の出先はない。島に住んでいる組合員は、正：14 人、准：16 人の合計 30 人である。この他に島の出身者で、現在は本島側に住んでいる組合員が多数いる。生活の利便性を考慮して島の外で暮らしていると思われるが、島の漁港を利用することは少ない。

2015 年国勢調査時の漁業就業者は 17 人で、「宿泊業・飲食サービス」（21 人）と「教育・学習支援業」（教員が主）（20 人）に次いで多い。つまり久高島は漁業と観光の島と位置付

けられるわけだ。

島で営まれている漁業は1本釣り（マグロの旗流しとソデイカ釣りで、ソデイカの漁期は12～5月で基本的に両方を兼業している）、イノーで営まれる潜水漁業、深海一本釣りともズク養殖である。また後述するように陸上部では海ブドウの養殖も行われている。一本釣りを営む島民は2経営体、島の出身者は9経営体である。また潜水漁業は島民8人が営み、出身者は7人だ。なお島の出身者は南城市内に分散して居住している。



ドラムと巻揚げ機を装備した漁船（左）、南側の斜路上に引き揚げられた漁船と修理場（右）

## モズク養殖

漁港用地内には木枠にブルーシートを張った水槽が多数並び、オキナワモズクの種付けが行われていた。多数のモズク養殖用のノリ網が防波堤に干してある。久高島ではちょうどモズクの種付けが始まったところだった。

島民でモズク養殖を営むのは5経営体である。一方、島の出身者で営むのは13経営体であるが、ここでは島民だけが種付けを行っている。

2人の漁師が種付けした網を沖だしする作業を始めたところだった。久高島ではフィルムを海に沈めて天然採苗したモズクを水槽の中でノリ網に種付けしている。この天然採苗方式は隣の津堅島と同様である。漁師によると置き出しした網を3段階に分けて展開し、漁場に張り込むという。本島側に較べると、網の沖出しは2ヶ月ほど遅いという。

モズクの区画漁業権が設定されている海域は久高島から5kmほど離れた志喜屋<sup>しきや</sup>漁港前面のリーフ内である。



種付け中の組み立て式水槽（左）、種付けしたノリ網を海に移動する漁師（右）

## 海ブドウ

漁港から坂を登った台地に海ブドウ（クビレツタ）の養殖施設が並ぶ。海ブドウは陸上養殖で海から海水を汲み上げ、肥料を添加してエアレーションをしながら育てている。久高島で海ブドウを養殖しているのは4経営体だが、このうちの「福 YOU」（福治友盛さん）の養殖場を訪ねた。

福治さんは20年前から海ブドウ養殖を手掛け、周年にわたって養殖する専門業者である。木の柱と梁で組み立てられた建物の中にコンクリート製の水槽が並び、建物全体は半透明なビニールシートで囲われている。水槽内にはフリーと網に置かれた状態の2つの形態で海ブドウが育っていた。生育段階に応じて調整しているのだろう。また日照を調整するために天井には寒冷紗が張られている。

福治さんのところでは、養殖に生体融合型光触媒の「トリニティゼット」を使っているという。これを希釈して水槽に噴霧すると、海ブドウの生長がよいそうだ。

養殖場のかたわらでは福治さんと息子さんが海ブドウの出荷準備をしていた。生産した海ブドウは直接宅配で全国に発送しているようだ。海ブドウは日持ちがせず、内地に流通するのは難しいと聞いていたが、最近は技術的に克服して可能になっているようだ。福治さんによると、発泡スチロール箱に保温して送れば1週間はもつという。ここでは500gパックの海ブドウを2,000円（送料別）で販売していた。



海ブドウの養殖施設（左）、出荷作業に忙しい福治さん親子（右）

徳仁港に着くとちょうどフェリーが入ってきたところだった。どうやら今日から運航が始まったようだ。

8時30分の高速船に乗り、本島にわたる。乗客は15人ほどいた。すぐに久高島の漁師が所属している知念漁協に行き、島の組合員や漁業について簡単に話を聞く。この漁協の職員は女性ばかりで、親切に対応してくれた。

那覇空港でレンタカーを返却し、「やんばる急行」バスに乗って本部港<sup>もとぶ</sup>に出て、次の訪問先である伊江島に向かった。

### 【文献】

比嘉康雄（2000）：日本人の魂の原郷，沖縄久高島，集英社新書，集英社，東京，pp. 222.

浮田典良（1962）：沖縄久高島の土地制度、史林、45(1)、128-137.